オナニーさん
AGES
18
AND UP

オナニーさん

まぁ僕が言いたいのはですね…つまるところ人生にオチはないんだよ…ってことなんだよ……
どうもこんにちは。ラヂヲヘッドです。

まあもう恒例ですね。〆切ブッチで僕がテンパってるのも内容にオチがついてないのも…。
でもね、それが現実なんですよ。それがヒリヒリするリアリズムなんですよ！

…冗談はさておき。え、冗談じゃない？　冗談なんだよ！　…まあそういうことでね、今回は「ＴｏＬＯＶＥる」に登場する金色の闇ことヤミヤミことヤミちゃんをメインにした内容ですよ。今までジャンプ系に手を出すことはめったになかったんですが、本誌でバニーヤミが出てきた時ガツンとやられまして、これだ、これを今描かねばどうしようもあるまい…と思い立ったのが４月のことでございます。当然この本は翌５月に控えたふたけっとに向けて製作開始されたわけですが……まぁそこはヒリヒリする現実ってぇヤツです。

ここでラヂヲヘッドがどれだけ苦労したとな怠けたとかそんなこと語っても誰も嬉しくないんで（含自分）割愛しますが、いつものように難産だったことだけはお伝えしてもバチは当たらないでしょう。しかしヤミとるくの絡みって「髪の毛変形して操れる」以外に何の関連性もないじゃねえか！いい加減にしろ！　とお思いの諸兄もおられるかと思いますが…あー…この話題終わり。

…ともかくね、自分が可愛いと思うものをこれからも描いていきますよ！
るくは現時点の瞬間最大風速的には一番可愛いんだから仕方ないだろ！
ニコ動の３Ｄるく護摩会動画とか見ちゃったんだからよ！！
バニーヤミはなかなか登場回まで単行本がおっつかないし！（十巻現在）

今回ルリ分と萌分の多くは、ゲストで小説を書いて下さった神谷涼さんが担当してくださっています。
「絶対隷奴」でコンビを組んでからもう長いのですが、萌を書いてくださったのは今回が初！「ドキッ！ルリだらけ大相撲夏場所モロリもあるよ」という極めて特殊なエロスを、鬼気迫る筆致で描き出してくれたそのエロ魂には感服の念をぬぐえません。ギャグとエロスがアヴァンギャルドに融合したその内容は読んでのお楽しみです。

では貴方がこの本を楽しんでくれることを祈って。

2008.8.6　ラヂヲヘッドより

「これでいいんですか…？」

うおおっ、ロリバニー！　ヤミちゃん似合ってるよ！

「この服…なにかいかがわしさを感じます。それに私に変身能力があるからって、こんなモノを生やさせるなんて…えっちいのは嫌いです」

でも平和な日本じゃ暗殺依頼なんかまずないし、就労ビザもないうえその外見じゃどこでも雇ってくれないでしょ～？　無一文じゃお肉食べられないよ？

「……特別に大目に見てあげます」

今日のオナニーさん

不法滞在宇宙人・ヤミヤミさんの場合

①ヤミヤミさんは、お友達にご馳走になったすき焼きの味が忘れられないのだった。

「これが地球の技術力を結集した…お、おなほーるですか(ごくり)」

早くオナホ使いたくておチンポ胸まで反り返らせるなんて、ヤミちゃんも結構えっちいですね～～～(ニヤニヤ)

「え、えっちじゃありませんっ！ 地球の文明水準を調べるための…調査ですからっ！ 本当はイヤだけど仕方なくやるんです。カンチガイしないでください」

(宇宙でも名高い地球産のオナホール…えっちいのは嫌いなのになぜかおちんちんが高鳴ります…)

②ヤミヤミさんは短期滞在しか想定していなかったので、鯛焼きを買える程度の日本円しか調達していなかった。

そうそう、そのまま先っぽにあてがって、一気に根元まで引き下ろしてごらん。

地球人よりはるかに高性能な、ヤミちゃんの敏感なトランスオティンティンなら、きっと飛び上がるくらい気持ちイイよ～？

はあ　はあ

「こ、こうですか…？　んっ……ひゃっ？　あ…あ、さ、先っぽに…オナホールが、吸い付いてきますっ！こんなのに一気に突っ込んだら、一体どうなっちゃうんですか…？　こ、怖い気もしますけど、これも依頼ですからっ。…狙ったターゲットは必ず仕留めます…！」

ぐっ

ふぎゅ

③ヤミヤミさんの変身（トランス）能力は、髪をはじめとした体の一部を自在に他の物質に変換・変形できるようだ（チンポ程度なら十本単位で生やせる）

「じゃ、じゃあ行きますっ！」
（ずぷっ！　ぬぷりゅりゅっ…ぬごっ！）
「あっ…？　くあ…
あひゃあああ…
あひゃあああっ！」
どくんっ
びゅるっ
じゅぱっ
じゅぱっ
おおー、すごいすごいw
射精も宇宙最強クラスだねぇ～。さあ、まず一発目♪

④宇宙殺し屋チャンピオンのヤミヤミさんは一度狙ったターゲットは必ずしとめるが、
なにをして「しとめた」とするのかはヤミヤミさんの胸先三寸だ。

「こんどは…んっ、慌てずに…じっくり腰を落ち着けて両方検証します」
ヤミちゃんの思うままにやってみな？僕はここで見ててあげるからw
「…気が散るのであんまりえっちい目で見ないでください。殺しますよ」
（わおーヤミちゃんセンズリに超真剣だよ！ｗｗ）
んっ
んっ
しゅちっ
しゅちっ
ぬぽっ
ぬぽぬぽっ

「んっ、んっ…ふぅっ、やっぱり手の方は…
思い通りに動かせる代わりに刺激が弱いですね」
「左手をトランスさせたら意味ないですし…
そうだ、おちんちんがこれだけ長ければ…」
ちろっ ちろっ
「…んっ…ちゅっ…やっぱり思ったとおりです。
これなら十分口まで届きますね…っ。…んんっ
変な味です…。でもこうやって舌と口を使って
足りない刺激を補え…ぱっ……んんっ！」
凄いよヤミちゃん教えてもいないのに
自己エロ進化してるよ！
ピュル
しゅっ しゅっ

「（ふごっふごっ）んぁっ、鼻のすぐそばでスゴイ臭いがっ…！
く、屈辱です。私のおちんちんがこんな臭いするなんて…っ！
こんなクサいの、どっちかといえば結城リトのほうがお似合いです……ッ？」
「あっ？　ダ、ダメ、今上がって来ちゃダメ、ダメですっ、
こんなチンポ臭トリガーにして射精しちゃうなんてっ…！
そ、それとも結城リトのほうっ？　ど、どっちにしても
ダメです！　止まりなさいっ！　止ま、止まっ……と
まあっっ！」
プッ
ごくごくっ
がくん。

「あーっあっ、ら、らめッ止まらなっ……
お、おおっ…おぅっ、ほぉおっ！そんあ…っ
つられてっ、もう一本もっ……出、で、れ…
つりゅうううっ！」
ボタッ
ボタッ
ボタッ
「あはわあっ！」
ビュッ
「ス…ステレオで射精ええっ…！」
「次は交互にきまひたあっ！」
ビクッ
「これっバカになりまうっ！」

「と、いうことで」

「先ほどの検証も予想外の要因のせいで失敗しでしまいましたので、今度は万全を期して手、オナホ、口の三本にしてみましたが…？」

……あっ

ヤミちゃんがなぜ宇宙最強なのか今オスの本能で解ったような気がしたよ、僕…

⑤ヤミちゃんの依頼料はただでさえ法外なお値段だが、
クライアントの都合で依頼を取り消す場合、そのキャンセル量は依頼料の倍額となる。

「えっちいのは嫌いですという前に
ひとつ聞きたいことがあります」

「…このポーズはなんなんですか？」

意味はないよ…

今日のセックスさん

地獄の清貧お姫様・瑠玖羽さん　&
不法滞在宇宙人・ヤミヤミさんの場合

あ、るくちゃん、お仕事し終わったとこだった？
ごめんね着替えてるとこ。

あ、いいよそのままそのまま。
今日はね。新しい友達連れてきたから。

色々あってちょっと前に知り合った子なんだけどね
なんでも無一文の宿無しだから、るくちゃんところ
でお世話してあげられないかなーと思って。
るくちゃんに似てるとこあるからきっと気があうと
思うよ。うん。特に髪が似てるよね。ああ髪型じゃ
なくて髪をホラ…いろいろアレできるとことかね？

えー、まあとは、ほら、るくちゃん
が時々もてあましてるアレの処理なんかも
あの子なら十分相手務まると思うよ。頑丈だし
なによりまぁスゴイから。アレはるくちゃんに
ひけをとらないねきっと。さっきもそこで色々
遊んでたんだけど、まだまだ物足りないみたい。

あー…その、まあそういうことなんで
えっと…聞いてる？

「わかった。準備するから待っててて」

あ、ハイ。

「んコ…（ぶるるるんコ！）」

うわっはっ、今日はまた一段とすごいねぇ。
何日分溜めこんでたの？

「…四日分」

よ、四日でこんなに？　…なにか空恐ろしいものを感じるな…

そんなになるともう一人で処理するのも大変でしょ？
今日は期待してもいいかもよ～？

「じゃあ手加減なしで」

おーさすがるくちゃん、こっちのサイズも容赦ないねぇ。
「そんなことはない」
でもこれ、るくちゃんの身長の三分の1くらいありそうなんだけど…。
「入れられるサイズにはなってる」
い、入れるんだ……それを
마음
하나

最初はぎこちなかったけど、仲良くなって良かったw

「あっ、ひゃっ…なんでそんなとこが…っ！」
「宇宙人でも感じるところは同じか」
くいくい
しゅっ
しゅっ

「んおおっ、おまんこの中が私に断りもなく
えっちいトランスしまくってますうっ！」
「ほあぁっ……！　膣内がスクラム組んで、
チンポこねくりまわしてくるッ！！？
はおっ！　おッ、子宮のほうから孕まされに
射精チンポに特攻繰り返してくるっっっ？」

「あの…、私たちの出番てこれだけですか？」
石津
「…もう少し…の…辛抱…よ…」

「ちらっ…なんちゃって」
「…はぁ…は…ぁ…」
「も、萌さん…なんか息が荒いですよ？」
「…あな…たが…そん…な…ことしてる…せいで…もう収ま…りがつか…ない…わ…」
「もっ、萌さん？ 次！つ、次のページから始まりますので！」
「こっ…呪う…わ…責任…は…とっ…てもら…うわよ…神…谷さんの…小説の…中…で～…」
「…その包皮…手術しないとまずいんじゃないでしょうか」
「こっ…ひ、酷い…わ…」

ルリ相撲夏場所一幕目

談志 神谷 涼

風雲急を告げるルリ・スタジアム。
略してルリスタ。
今宵、注目の一番勝負を前にルリスタは震えていた。

「ひがぁしぃ～　るりひかりぃ～」
大歓声の中、土俵に上がる一人のルリ。
そのまわしは、股間で二股に分かれている。
おそらく化粧まわしの下は、ペニスも膣口も菊座も、全て外気にふれているのだろう。
「にぃしぃ～　もえのふじぃ～」
罵声の中、土俵に上がるのは……ルリではなく。
萌。
所在なげに立つその身長は、ルリよりも頭一つは高い。

「なんということでしょう。わたしたちルリ帝国国技であるルリ相撲に今場所、外遺伝子力士が参戦です。行司のホシクラゲ・ルリさんも緊張を隠せません……どう思いますか、解説のホシバナナ・ルリさん」
「バカばっか」
「今場所最大の注目勝負です。実況はわたし、ホシマンゴー・ルリが送ります」
「バカばっか」
「それにしてもホシゴヤマ・ルリ親方も思い切ったことをしました。外遺伝子力士……ルリとはケタ違いの身長です。肌の色も濃くて強そうです。果たしてルリヒカリに勝機はあるんでしょうか」
「バカばっか」
そして外される二人の化粧まわし。
露になる二本のペニスはすでに勃起し、逞しいノの字を描いていた。
そして傍らから手渡されるのは……。
「いよいよ、両雄がローションを手にしました。体に塗っています。ルリヒカリ、相変わらずすばらしいテカり具合です。まさにアラバスターの竿とルビーの亀頭を持つルリ。光っています。ここまで先走りの匂いが届いています」
「バカばっか」
「さて一方、注目のモエノフジ……さすがの黒さです。どれだけのルリを泣かせればあの黒さになるのか……いえ、亀頭の黒光りではありません。包茎です。しかも中途半端な大きさ……これは強烈です。すごい匂いです。きっとたくさんのルリを泣かせるのではなく、ルリに泣かされてきたのでしょう」
「バカばっか」
ペニスに向けられる客席からの好奇と蔑みの目。無数の野次。
屈辱に目を潤ませながら、萌は呟かずにはいられなかった。
「の、呪うわ……」
それがルリ相撲のタブーと知りながらも。
「これはいけません。モエノフジ、なんと仕切り前に私語です。行司ホシクビ・ルリからイエローシードが渡されます」
「バカばっか」
「モエノフジ、イエローシードです……」
(ピピーッ!)
ホイッスルを鳴らし、黄色のカプセルを持って駆け寄る行司。
「……っ」
「イエローシード挿入します……」(ぐいぐい)

萌の菊座にねじ込まれる黄色のカプセル。
「っ……ぁ!」
「イエローシード……マスタードカプセルをアナルに入れられてしまったモエノフジですが。異種遺伝子力士の力はそれでも発揮できるのでしょうか。このままでは、激しい動きに連れて腸内でカプセルが破裂。また、試合が長引いてもカプセルが腸液で溶けてしまいます」
「バカばっか」
「はい。過去にはレッドシード……ハバネロカプセルを膣内に挿入されつつも勝った力士もいたと言いますが。今夜、その伝説は再現されるのでしょうか。開始前から早くも手に汗握る展開です」
「バカばっか」

マスタードカプセルを肛内に入れられたモエノフジ。直腸にけばだつような異物感、そしてその中身が溢れることへの恐怖。数多の時代と数多の世界で多くの痛みを味わった萌の遺伝子も、この異様な競技ルールには膝をカクカクと震わせてしまっていた。勃起していたペニスも、ぐらりと中勃ちになってしまう。
(こんな……競技だなんて、聞いてない……)
アナルを少し締め付けるだけでも、カプセルを割ってしまいそうな恐怖が襲う。
痩せた、あばらの浮いた胸に脂汗が垂れた。周囲を埋め尽くすルリからの罵声、野次は絶えない。周りは全てルリ。好奇の視線はあれども、好意の視線などない。
屈辱と羞恥、緊張、諦観……モエノフジの目には涙すら浮かべ始めていた。

そんなモエノフジに対し、勝利を確信したかのようにルリらしからぬ笑みを浮かべるルリヒカリ。
大関一歩手前まで進みながら反則行為を繰り返したルリヒカリは土俵にさえ復帰できるなら、この余興じみた外遺伝子力士との試合をOKしたのだ。
(さんざんメディアで持ち上げておきながら……勝手な都合で捨てられてはたまりません。親方だってさんざん煽ってきたくせに……)
ルリ相撲界でも指折りの変態ルリヒカリの反則は悪質だった。
『全身ローションボディコキ事件』や『決着後膣内射精事件』、『指先媚薬塗付事件』は、厳格なルリ相撲の世界をダーティーに変えた大きな要因でもある。中でも彼女の力士生命を揺るがせた最悪の試合では『肉棒背負い投げ事件』『フェラチオ指示発覚事件』という二つの大反則が知られているのだ。
今やルリヒカリとの試合をOKするルリ力士などいるはずもない。
困り果てたルリ相撲部屋とルリヒカリが呼び出したのがモエノフジ。ほとんどルリ相撲のルールすら教えられていない、掟破りの外遺伝子力士であった。モエノフジの存在に、ルリヒカリへの罵声はすっかりかき消されている。
全てはルリヒカリの計算通り。
あとは土俵上で萌のゆるマンを犯して、ルリたちに見せてやるだけ。下品でグロテスクな萌の股間を目の当たりにして、ルリヒカリの変態性欲はますます昂ぶり、勃起はなお反り返り、先走りを漏らすのだった。

「いよいよ土俵入りです。向かい合う両者。モエノフジ、すでに息が荒いようですが、大丈夫なのでしょうか。試合直前の射精はレッドシードです。あの赤い魔王がモエノフジの肛門に降

臨するのでしょうか」
「バカばっか」
塩をまき、土俵にガニ股で四股を踏んで観客らに股間をよく見せる。
そうしてしゃがみ、見合うモエノフジとルリヒカリ。
開かれた二人の脚の間は、両脚を下ろした後も、背後からまる見え。
モエノフジの菊座はゆるみ、カプセルに怯えてひくついている。緊張に濡れた秘所では、はみだし黒ずんだ花弁が下品な形で皺をよらせていた。ぴっしりと菊座周りまで生えた陰毛はまったく処理されていない。黒ずんだ皺だらけの陰嚢は、半端な肉茎とは違う特大のもので。土俵に着いてしまいそうなほど垂れ下がり揺れていた。そんなものを見せつけられ、背後の観客らからの野次もいっそうひどくなる。その屈辱にモエノフジの菊座はひくつき、また肉棒が激しく勃起してしまうのだった。
対するルリヒカリの股間は形よくぴたりと閉じ、ピンク色の典型的なルリまんを見せている。きゅっと引き締まった陰嚢は白く、揺れもしない。かつて色素沈着をナノマシンで防いだことでスキャンダルに会ったルリヒカリだが、二つの股間の対比はそんな過去のニュースも忘れさせた。それはまさに、掃除されていない公衆便所と、ビジネスホテルの便座の差であった。度重なる反則からの反感も、外遺伝子力士への反感が覆い隠している。さらに股間の様子までが見事な対比を見せて、観客をルリヒカリの味方に変えていた。
観客の声に、ルリヒカリはほくそえんだ。
「見合ってください。では、はっけよーい……」
ホシクラゲ・ルリ行司が軍配団扇を二人の間に割り込ませる。
二人の脚に力がこもり、観客たちの目の前で二つの菊座が引き絞られた。二つの勃起がさらに急角度を描く。
逆境にあってなお勃起するモエノフジに、ルリヒカリはかすかな苛立ちを感じずにいられなかった。
(一気には勝ってあげません……じわじわなぶりものにしてやります……)
金色の瞳に悪意を灯すルリヒカリ。
一方、モエノフジは羞恥と屈辱に対して裏腹な反応をする、己の体に焦るばかりであった。
「こすった――っ!」
行司の掛け声と同時に、ルリヒカリが距離を詰めた。
「!?」
モエノフジが状況を把握するよりも早く、ルリヒカリの張り手がモエノフジの亀頭を襲う!
小さな手の平が、黒ずみローションにぬめる亀頭を何度も掌底で突き、掌で擦り上げる。
「こすった! こすった! こすったーっ!」
行司がルリらしからぬ声を張り上げる中、ルリヒカリの手が激しく突き出され。ローションは泡だってぶちゃぶちゃと卑猥な音を響かせた。
「っ……あっ……」
射精かと思うほどの勢いで飛び出す、モエノフジのカウパー。迸る粘液がルリヒカリの顔に浴びせられる。
反撃の機会……しかし、モエノフジは公衆の面前で亀頭を激しく刺激され動けない。
すでにモエノフジは土俵際まで追い詰められていた。
「っ、臭いカウパーですねっ。でもいいですよ。わたしもそういうのは嫌いじゃありません」
にんまりと笑って、ルリヒカリが顔についたカウパー腺液を舐める。そして同時に彼女の指が張り手から形を変え、モエノフジの包皮の中、正確に鈴口へとねじ込まれた。さらに、もう一方の手が先漏れとローションに蕩ける裏筋をはたいた。張り手にはたかれ続けたペニスはもう、ルリヒカリの手が触れただけで射精寸前だ。
「っ、ひっ……」
「と。こんなにすぐには土俵外射精させません。ルリ相撲に必要なものはショーマンシップですから」
ルリヒカリの両掌が、モエノフジのペニスを挟む。
「合掌ひねりです」
「これはルリヒカリ、いきなりの大技です。合掌ひねり、合掌ひねりです。身の程知らずな外遺伝子力士を土俵に叩きつけようと言うのでしょうか」
「バカばっか」
「果たしてルリヒカリが、あのモエノフジを巨体を投げることが可能なのでしょうか。そして射精寸前のあのペニス、あっさりとモエノフジは精液を土俵の外に放ってしまうのでしょうか」
「バカばっか」
「はい、ふりだしに戻ってください」
ぎゅるんっ――!
「っひぃぃぃ……っ」
つかまれた亀頭を中心に、体が持ち上げられる。視界がぐるりと回って。
気がついた時にはルリヒカリの背後にすとんと立ち。
そして。
振り返ったルリヒカリに対して、黄色くて濃く臭い、萌特有の精液を放っていた。
「思った以上の勢いですね……ふふ、熱いです。気持ちいいですか? ほらほら、射精してる最中に亀頭をすりすりしてあげますよ?」
いやらしい音をたてて、ルリヒカリの両手指が射精中のペニスの包皮を剥き上げ、露になった亀頭を揉むようにして精液を搾り出す。
びゅるびゅると音さえ立てて迸る精液は、まさしく薄黄色の奔流。しかも射精中の亀頭をいじめられて、モエノフジは陶然と射精を耐えることなく続けた。剥き出しの陰嚢が何度も収縮し、精液を送り出す。
公衆の前で射精し、しかもその精液を……敵であるルリヒカリの体に全て浴びせていた。
「なんということでしょう。外遺伝子巨漢力士モエノフジの重量はやはり恐るべきものだったということでしょうか。ルリヒカリ、なんと場外への投げ飛ばしに失敗です。モエノフジを土俵中央に着地させた上、その大量の精液を浴びてしまっています」
「バカばっか」
「それにしても何と黄色く臭い精液でしょう。あれはもはや精液ではなく精ゼリーです。ルリヒカリの白い肌が黄色く覆われています。モエノフジの悪運恐るべし、射精こそしたものの全てルリヒカリに浴びせて土俵外射精しておりません。ルリヒカリもそのきつい精液に呆然とするばかりです。あるいはこれこそが悪魔のモエノフジが計算した結果だったのでしょうか」
「バカばっか」
「セーフ! ワーン、トゥー……」
「ホシクラゲ・ルリ行司から正式にセーフ宣言が出ました。試合続行です。さあ、射精直後で半勃起になってしまったモエノフジの勃起。十カウントまでに果たしてモエノフジは完全勃起できるのか……あっ、その前にルリヒカリが仕

掛けました」
「バカばっか」
「ふふ、前みたいに全身ローション塗る必要がなくなりました。ありがとうございます」
「っ……どうして。すぐに負けたらお金くれるって……」
「すぐに負けてはみんな納得しませんから。がんばって納得いく試合をしましょう、モエノフジさん」
「そんな……約束が……あが……っ」
精液まみれでにっこりと笑うルリの顔を呆然と見ていた間に。
ルリヒカリの手は、モエノフジのむき出しのアナルへと周りこみ。その直腸へと親指と人差し指をねじこんでいた。
「緩いケツマンコですね。手に精液を塗らなくてもよかったでしょうか」
「っ　ぁ……ルリ……そんな……っ」
ルリヒカリの指は、モエノフジの直腸内。あのイエローシード……マスタードカプセルを一瞬で探し出し、潰し割っていたのだ。宇宙で最も指を鍛える競技と言われるルリ相撲力士ならではの技であった。
即座に直腸が灼熱し、モエノフジは上半身をくねらせ喘ぎ、ぽろぽろと涙をこぼした。
「やっぱり。あなたたち萌はみんなマゾって本当なんですね。お尻の中にマスタード塗られてビンビンですよ」
一発だけ張り手を押し出す、ルリヒカリ。
黒光りする鋼のようなモエノフジのものが、ルリヒカリの手を弾いた。
「エイト、ナイーン……」
「勃ちました。ギリギリで大勃起です、モエノフジ。最初にも増して激しい勃起。さすが陰嚢が大きいだけあって、その精力はまるで尽きるところがありません。どうやらルリヒカリも己を取り戻したようです。いよいよ勝負がわからなくなってきました」
「バカばっか」
「る、ルリ、もう、許して……っ」
「すみません。許してあげてるんですけど、試合ですから。観客の皆さんが納得するまで戦いましょう」
ぐりっぐりっ、とモエノフジの腸内を指がいたぶる。
腸壁に塗り広げられるマスタードに、モエノフジは泣き叫ぶが、そんな様子にも観客の歓声罵声嘲笑だけが返って来るのみ。
「こすった、こすったっ、こすったこすったーっ」
行司の仕切りが催眠術のようにモエノフジを揺さぶり、くらくらさせる。全てが白昼夢のようで。高い賃金に目がくらんで受けたこの仕事自体が夢のように――。
ぐらり、とモエノフジの体がふらつく。身を倒しかけたモエノフジに、ルリヒカリは素早く背後へと周りこんだ。
「大丈夫ですか？　じっくり時間をかけてラクにしてあげますから。がんばってくださいね」
後ろから軽く押して。それだけでモエノフジは土俵の中央に膝をついてしまう。
「あ……あ……」
虚脱したモエノフジの腰を、力強く引き起こすルリヒカリ。
背後へと剥き出しの股間を突き出し、両手さえも土俵につけられてしまった。そんな中でさえ、モエノフジは決して土俵の中から出されずにいた。直腸の刺激に勃起した亀頭が土俵砂にこすり付けられる。加虐に適応した萌は、そんな状況にさえ興奮し、秘所を濡らしペニスをなお反り返らせてしまっていた。
「では、いただきます」
ルリヒカリが、そう言ってがっしりと腰を掴んできた時。ようやく、モエノフジは我に返った。
膣口に熱いものが押し付けられる。
そして。
「え……ぁひぁぁぁぁぁ！」
その直後、モエノフジはルリヒカリの白い剛直で貫かれていた。
しかも、ルリヒカリの指は念入りに、モエノフジの腸内にマスタードを塗り続けている。
「予想通りのゆるまんですね。でも、この穴がどれだけのチンポで開発されたのか想像しながら犯すと、なかなか興奮できますよ」
「んひぃ！　ふぎっ、やっ……やめてっ……のっ、のろう……わっ」
「好きなだけ呪っていてください。膣内射精は土俵外じゃありませんからね。たっぷり犯してあげますよ」
容赦なくルリヒカリは腰を打ち付ける。ルリ相撲力士特有の、ばちんばちんという弾力音と同時に、モエノフジの陰嚢が乱舞し、その上だらしなくはみ出したモエノフジの陰唇が白いペニスに絡みつき下品な音を立てる。
ルリヒカリの持ち物はルリとしてはおそるべき巨根である。それは、モエノフジの体格差に対しても同様であった。むしろ通常のルリ娼婦らでは根元まで入れることもできなかったと言っていい。ルリヒカリは、根元まで押し込み、子宮口をぐいぐい押す快楽に酔った。
ゆるくふやけたようなモエノフジの膣は、ルリヒカリの剛直をゆるゆると締め、無数の襞で擦るのだ。
ふと思い出したように、腰を捕まえていた片手で、モエノフジのクリトリスを摘まんでやる。ひっぱり、ねじり、抓って、いじめてやるたびに、だらしない膣肉が、無駄な抵抗をするようにきゅうきゅう締めつけるのが面白かった。抜き差しするごとにずるずる延びて、ルリヒカリの肉竿へしゃぶりついてくるような肉びらが、ルリでは見ることがないほどいやらしかった。
「うふふ、いいですね。うちの部屋で引き取って、わたしの直弟子にしてあげましょうか？」
「……っ！　っ！」
肩越しに諦めきったような顔で見てくるモエノフジが、力なく首を左右にふる。
「頷いたらすぐに負けさせてあげるつもりでしたけど。もう少しがんばってくださいね。わたし、少女ですから。けっこう激しいですよ」
首を横に振りながら、自ら腰を使い始めているモエノフジに、ルリヒカリは内心でサディスティックな笑みを浮かべた。見た目どおりのだらしない膣、卑猥に揺れる陰嚢に、ルリヒカリは支配欲をそそられ、直腸のマスタードをかき混ぜながら、なおさら激しく腰を打ち付けてやるのだった。
「こすったこすったっ、こすったこすったーっ」
モエノフジの頭には行司の仕切りだけが響いていた。今や彼女は無意識の内に腰をくねらせ、より刺激を、快楽を求め始めていたのだった。
「どうやら技が固まってしまったようです。ルリヒカリの激しい突き上げ。背後を取られたモエノフジは息も絶え絶え……いえ、違います、モエノフジ、なんと突き上げられながら、勃起した肉棒を土俵砂に腰を擦り付けて自慰にふけっています。神聖な土俵で自慰行為。これも外遺伝子の為せる業なのでしょうか」

「バカばっか」
「汗と精液で濡れていた土俵砂が、見る見るモエノフジの肉棒でかき混ぜられ、どろどろに捏ねられていきます。これはまるでルリ帝国神話天地開闢を思わせる行いです。黒いモエノフジの肉棒の先端がめくれ上がり……ピンク色の肉棒が泥をこねています。果たしてこの混沌の中から、モエノフジはいかなる技を繰り出そうとしているのでしょう。モエノフジは天地開闢の神の再来なのでしょうか」
「バカばっか」
「ひぁっ……ああ……っ、ぁぁっ！」
ついに土俵の泥に射精してしまうモエノフジ。再び、大量の精液が……土俵の泥中に溢れかえる。
「出してしまいましたか？　安心してください。わたしはまだですから。もっと続けてあげますね」
ずぶり、と音がモエノフジに聞こえた。
「んぐぅっ……！」
彼女の腸内に、今までとは比べ物にならない大きさのものが入ったのだ。
「どうですか？　わたしの掌、まるごと入っちゃいましたよ。このまま、前立腺ごりごりしてあげますから……わたしが満足するまでチンポ勃起続けてくださいね」
「っ……あああああ……こ……こんな……」
射精直後にも関わらず、乱暴な前立腺攻めがモエノフジのペニスを休ませてくれない。
「少し正気づきましたか。もっと空っぽになるまで射精していていいんですよ。今回はわたしもクリーンな試合に勤めてますから。じっくり楽しみましょう」
まるで疲れを知らないように、ルリヒカリはモエノフジの膣内をぐちゅぐちゅをかき混ぜ、貫いてくるのだ。
「射精中のモエノフジにさらに突き上げ、前立腺崩しにかかりました。どうやらこれは、精液がなくなるまでモエノフジが犯されるか、ルリヒカリが全ての精液をモエノフジに射精するか、勝負はそこにかかってきたようです」
「バカばっか」
「果たしてモエノフジに逆転のチャンスはあるのでしょうか。そして、射精した精液でさらに泥をこねることにどんな意味があるのでしょう。泥の中をぐちゃぐちゃとかきまぜる肉棒を見ていると、まるでわたし自身、犯されているような気がしてきます。まさしく勝負は淫靡の極みとなってきました。果たして勝者はどちらとなるのでしょう」
「バカばっか」
「ひっ……ぁっぐ……」
たまらず連続で射精してしまうモエノフジ。彼女の下では土俵がどろりと精液の沼と化している。
「また出してるんですね……ほらほら、もっと前立腺いじめてあげます。チンポ休めないでください」
「んひぃっ……ひぃっ……」
さらにマスタードを塗りつけるように前立腺をいじめれば、びくびくと痙攣しながら無理矢理ペニスが勃起させられる。
もはや、モエノフジに出口はないかのように思われた。
そのまま、さらに犯される。
（もう……このまま犯されて……ルリの奴隷にされた方が……）
今まで全ての萌が多次元宇宙で受けた、あらゆる虐待と不幸と被虐が遺伝子記憶に蘇る。じわじわと、モエノフジの頭の中を侵してくる。精液が迸り、前立腺を乱暴に苛められるごとに、モエノフジには被虐の悦びが満ち始めていたのだ。
腸が焼け付きじんじんとひりついて。膣奥をずんずんと貫かれ。包皮のめくれあがったクリトリスを弄られ。巨大な陰嚢から精液を搾られて。何度も何度も、モエノフジの精液は土俵に迸った。
陰嚢が空虚なものとなっていった。
しかし、土俵外射精、もしくは本人が土俵外に出ない限り、敗北は認められない。
度重なる射精、モエノフジの精液で今や土俵は白濁の沼と化していた。土俵俵がかろうじて、その泥があふれ出す泥を食い止めている有様だ。
「ふふ、ではそろそろ、萌の腐れマンコに、ルリ精液を流し込んであげますね」
「……ぁ……はぁ……」
そしてモエノフジは、枯れていく精液と同時に。膣内でルリヒカリのものが膨らみ始めていることに気づいた。そしてその射精を待ち焦がれていることに気づいてしまった。もはやモエノフジは半ば以上、ルリヒカリの性奴隷と化しつつあったのだ。
しかし。
モエノフジは他の多くの萌のような、暗い深淵へは落ち込まなかった。破滅の未来も迎えなかった。
もし、天に。
運命を司る存在がいるのなら。
全てを知り全てを為す神がいるのなら。
それは。
慈悲だったのかもしれない。
「ほらっ、それじゃあ奥に……え？」
「ふぁ……え？」
その時。
射精のために最後の一突きを込めんとしたルリヒカリが。
転んだ。
モエノフジがさんざん捏ね上げた精液泥。
足元に広がる精液の泥に、足を滑らせてしまったのだ。
深々と貫いていた手もペニスも、ずるりと抜け、ルリヒカリは射精寸前のまま仰向けに倒れてしまった。おそらくはそのままでも、次の瞬間には土俵外射精してしまっていただろう。
そして。
モエノフジは、射精を求めていたルリヒカリのペニスを追い。
腰を持ち上げて。倒れたルリヒカリの上に跨った。
忠実な性奴隷モエノフジは、ルリヒカリの射精を子宮に受け止めようとしたのだ。
かくして凸は凹へ。
鍵は鍵穴へ。
ルリヒカリのペニスは。
彼女自身が大きく広げていた穴へ。
モエノフジの——アナルへ。
ずぷりと、観客全てに音が聞こえた。
そして、さんざんマスタードを塗りつけた腸壁で亀頭を擦られ。

ルリヒカリは絶叫した。喚いた。もがいた。泣いた。

泣きながら、射精した。

もがいても、馬乗りになったモエノフジをどかせることは、ルリの体格では不可能だった。しかもモエノフジの括約筋が引き絞られるごとに、その白い巨根にはべったりと――腸液で薄まったとはいえ――マスタードが擦り付けられるのだ。

モエノフジは腰をねじり、アナルにペニスを咥えこんだまま、体を半回転させた。

馬乗りになった上から、改めてルリヒカリを見下ろす。

泣きじゃくりながら、捻られた腰で二度目の精液を搾られるルリヒカリの姿は、モエノフジ自身と変わらぬ被虐の悦びで爛れていた。今までさんざん余裕ぶってモエノフジを慰み者にしていたルリヒカリ。だが、彼女も弱い存在だったのだ。今のモエノフジには、彼女のサディスティックな行動が、自らの被虐癖に裏付けられた――願望を投射するだけのものだったことがわかる。ならば、実際に被虐の悦びに身をくねらせたモエノフジが、ただ妄想していただけのルリヒカリに負ける道理など――

「ありえない……」

のだ。

試しに腰を揺する。それだけで、亀頭にマスタードを塗りつけられ、ルリヒカリは悲鳴をあげる。

「……呪って、あげたわ」

「だっ、だして……くださいっ！　抜いて……っ、しみる……っ」

優越感と共に。腰をぐるぐると己の腸内をかき混ぜるようにしてやった。

ペニスの隅々に、おそらくは鈴口にさえも塗りつけられるマスタードに、ルリヒカリが三度目の射精を放つ。相当の量だ。モエノフジの痩せた腹がかすかに膨らむ。けれど、あの犯される被虐の快感はない。ただ、相手の矮小さへの情けなさだけがあった。

「……ルリもマゾ、ね。……いい、わ……それらしい扱い……してあげる」

「許して……くださいっ、はなして……っ」

モエノフジが、ルリヒカリの足を背中に背負うようにし、アナルでつながったまま、ルリヒカリを逆さにぶら下げた。涙交じりの懇願も聞かず、白い顔を垂れ下がったグロテスクな陰嚢の下敷きにしてやる。今や、ルリヒカリには、その陰嚢を掴んだり噛み付いたりする気力もない。モエノフジのアナルに、正確には自らが塗りつけたマスタードに、支配されているのだ。

加虐の悦びこそなかったが、己を辱めた相手への単純な復讐心はあった。

ルリヒカリを抱えたまま、モエノフジは土俵外に向けて腰を突き出す。突き出された尻にペニスを咥えこまれたままの、ルリヒカリもまた背中と尻を土俵の外へと向けられた。

モエノフジは深呼吸し。

そしてつながったルリヒカリが離れないようしながら、全力でりきんだ。

腸内へ三度放たれたルリヒカリの精液は多い。それに、モエノフジは決して絶食して試合に臨んだわけではない。むしろ直前には肉付きを少しでもよくするためと称し、さんざん大量の食事を摂らされていた。

手で広げられた穴を、精液浣腸で奥から呼ばれたそれがひり出されてくる。

こげ茶色の塊は、ルリヒカリのペニスにも負けぬ硬さでぐりぐりと、その亀頭に押し付けられていた。

「いや……い、いやです。やめてっ、やめてください……っ」

「……呪う、わ」

容赦はしない。

ぐいぐいと押し出される大便。

それは大量のルリヒカリの精液で流し出されるように、挿入されていた勃起を無理矢理押し出して。

ぶぼっ！　ぶびゅびゅびゅびゅっ！！

ぶぼっ！　ぼっ！

その場に居た全員が、見た。

白濁の間欠泉。

漆黒の砲弾。

そして、それに逆さに吹き飛ばされていくルリ相撲力士――ルリヒカリの姿。

沈黙。

最初にかぶったモエノフジの精液。

腸内から噴き出したルリヒカリの精液。

そしてモエノフジの硬い腸内便。

それらにまみれて。

仰向けに倒れるルリヒカリ。

その巨根はべったりと黄色いマスタードが塗りつけられ、まさにフランクフルトさながらであった。

精液と糞便にまみれたルリヒカリ。その姿はルリヒカリ自身の汚れた心根に最もふさわしい姿に映ったと、後の横綱モエノフジは語っている。

「もえのふじ～っ、もえのふじ～っ」

沈黙の後。

行司が高らかに勝者を指した。

モエノフジは、ルリ相撲史上最も劇的な勝利を獲得した。

ルリヒカリは、ルリ相撲史上最も不名誉な敗北を喫した。

「まさかまさかの逆転劇です。まさに奇跡。天地開闢の構えはまさしく神風を呼ぶ儀式。今ここに、新たなルリ相撲の英雄が誕生したのです。思えば多くの問題行動で知られたルリヒカリ、いよいよこれで表場所からの退場となることでしょう。ルリ相撲協会からの厳しい処分が待たれます。それにしてもまさか、モエノフジがあんな勝利をするとは思いませんでしたね、ホシバナナ・ルリさん」

「バカばっか」

「それでは興奮冷めやらぬルリ・スタジアムから、本日はこの辺りで失礼いたします。実況はわたし、ホシマンゴー・ルリでお送りしました」

「バカばっか」

こうしてモエノフジは一躍、ルリ相撲会の寵児と化す。そしてそれは同時に外遺伝子力士参入の幕開けであった。モエノフジはその後、横綱の地位を得るまでに多くの外遺伝子力士と戦うこととなった。コンジキヤミ、ルクニシキ、パンジャヤマ……多くのライバルが登場し、また多くのルリ相撲ファンが生まれた。

それは固定されたファンのみの競技であったルリ相撲界において、まさに革命であった。革命を起こし、その名を後世に伝えられた名横綱モエノフジ……これがその第一歩。そして後年、人気漫画キン瑠璃マンにおいて、彼女をモデルにしたキャラクターとしてイシヅマンが登場したことは全宇宙周知の事実である。

しかしヤミはほんと難しいです。
元の絵柄に固執しなければいいのかもしれないけど
パロを描くときにはまず雰囲気を掴むために一度
きちんと似せようとしないとあとあと慣れてから
辛くなってくるんですよね。

実質的に絵がマネできずとも最終的に雰囲気
が出せればまずはＯＫとしてるんですが、
ヤミは微妙なニュアンスを掴み損ねると
別人になっちゃうんですよね。

このヤミは“いとこ”レベルか…

はい、そういうわけでしてね！　「オナニーさん」楽しんでもらえたかな〜？　……よーしみんないい返事だ！　だがもしも楽しめてなければ今夜あなたの枕元にお化けがでる。

前書きや本文ではあまり書けなかったヤミについての少々。ヤミを見ていてどうしても想起されうるのは、やはりルリなんですよね。もちろん直接的な前身にあたるのは同じ作者の「BLACK CAT」に登場するイブだということは分かっているんだけど、やはりそのキャラ造形にはルリの影響は無視して語れない気がする。そういう点である種のパターンとしてのルリを愛する僕にしては、大変に受け入れやすいキャラだったわけなんだけど、いざ実際に書いてみると、その難しさに悲鳴を上げそうになりました。ルリ描く感覚で描こうとしても絶対似ないんですね。変な話ですがそこで初めて「ああ、この子はルリじゃないんだ」と、まるで死んだ妹の姿を別の少女に重ねて愛してしまうダメ兄のような開眼をしてしまいましたよ。しかしこの元の絵の、「自分の知りえない未知のメソッドで描かれた絵」…とでも言いたくなるような、微妙なニュアンスや表情には大変難儀しました。というか一冊作ってもまだヤミの顔が把握できてません。結局自分の中の印象としては、今回描いたヤミはせいぜいが「腹違いの姉」レベルまでしか近づけてない気がします。まああくまで印象の話なんで、実際に元絵そっくりに描ければいいってわけじゃないですが、

今回はバニーヤミがきっかけの本だったので、ヤミのスタイルもバニーしか描きませんでしたが、またいつか、今度は別のコスチューム…普段の衣装やスク水、体操着、おしゃれ服とかのヤミも描いてみたいですね。来年くらいにまた一本くらい描ければと思ってます。

また、今回トランス能力も全然描けてないので、それについても次はトランスを駆使した変形エロでやってみたいですね。まあやりすぎて誰もついてこないような内容になっても問題ですが。でも髪の毛を触手チンポ化して、一人妄想触手レイププレイとかはこっそりやってそうな気がしますな。ていうかあんなに何度も「えっちいのは嫌いです」っていうのは、逆にえっちいことをいつも意識してる証拠だよね！　ぶっちゃけララの方がヤミよりずっと健全だよ！　と、そういうコンプレックスみたいなのをね。エロに絡ませられるといいなと。トランスで大人になろうとして失敗とか、嫌い嫌い言ってるうちに心と体のバランスが崩れて体が勝手にエロトランスとかね！　ちょっと思いつくだけでいくつかネタはあるので、漫画にしたいですね。

というわけで、今回、ちょっと特殊な構成の本でしたが、貴方のオナニーライフの華となることを期待して。

素晴らしい小説を寄稿してくださった神谷涼さんに敬愛を。

この本を手に取ってくれた貴方に友愛を、
この本を手に入れてくれた貴方に感謝を。

この本を愛してくれた貴方に両手いっぱいの祝福を。

2008.8.17発行
革命政府広報室

parano@jcom.home.ne.jp
http://www.radio.sakura.ne.jp/ 地平線の彼方で待ってて。

印刷　プリンティング・イン株式会社

生きろ！

こなさん
みんばんは
徹夜明けの
ホシノルリです
も…萌も
いるわよ…

今回私たちも出てる
(ハズ) のになんで表紙
にいないんでしょーか
理解できません
作者の前途を祝すと
ともに 断固たる
抗議の表れとして
萌さんに呪って
いただきます。

…の、の…
呪う…わ……っ！

モエ
ズビャ
ボッ
もーどーせ
徹夜明けだし

革命政府広報室